



えと文

廣川勝美

石の風

裏の時代は

たしかにことはあった
それを

百年たつたいま
刻まなければならない

文字の刻まれた

沈黙の石碑を
ただ

軽くふれながら
木々のあいだを

くぐりぬけていく
秋の白い風

それだけの風景である

けれども

ひとときのことは
せめても石に刻む

われらの時代は